



經典餘師
小學之部
三

口 11
2047
40



2067
40

讀法

小學卷之五

外篇

詩に曰く天

生民と

有物有則有

民の彛と秉

是懿徳と好

孔子曰く此

詩為者其道

と知乎故に

物有ハ必ず則

小學卷之五

外篇

前に説

詩曰天生烝民有物有則民之

秉彛好是懿徳

詩經に天地の間この

その人民に就て何一事も道なきもの則ちあり
君臣父子夫婦朋友の道なきべし
朝夕もあつる事より鳥獸草木に於て各
各理ともあつて法則あるものなり
理と秉守るべきを以て是を懿徳といふ人の性
の善なるが元より是懿徳と好く思ふものなり

孔子曰爲此詩者其知道乎故

有物必有則民之秉彛也故好

不幸相爲則
天下之賢に下
と能ハ不

其則至
其則至
其則至

也只病根去
不見所接所
隨ひて而長
爲爲

楊文公家訓に
曰く。童釋之學
記誦に止不其
良知良能と養
先入之言と主
爲當

日に故事と訓
て今古に拘不
必ず先。孝弟忠
信禮義廉耻等
の事とびてす

黃香日が枕
陸績が橘と懐
み。叔敖が陰
德あり子路が
米と負之類の
如き

天下之賢

朋友又ハ官長に。我身と下ヤレハ由ク出
來ガレ。況て不徳小人ガるハ。天下の
宰相トスルハ。人ハ賢徳の入り。身と下
其則至

於狗私意義理都喪

の利欲ハ長トシ義理
作法もぐ
喪ひぬ

接而長

是皆病根ある又接る所の惡に
○楊文公家訓曰
楊文公とくる學者の
童

稗之學不止記誦養其良知良能當

以先入之言爲主
童釋の學問ハ必ず書
物と誦讀に
又ハ記録

と事とする事及スト只一良に知トスル自然に父母
を親むと知ると良に能とて自然に行つ道ある
その生つたに在所の善と養つてつべ。總て幼穉
内するあり。固くもて先に入らる事ハ心の
深ぐるとれおかり。惡とミナクハ。畏ミキヤリ
日記

故事不拘今古必先以孝弟忠信禮

義廉耻等事
その善事と以て養つてつべ。外
徳あり人の行と訓おびゆるやうにやれ。古今の別
ん及ぶるなり。或ハ親に孝。兄に弟。さるる。又ハ忠信の
道禮義の方おびゆる廉直
に利欲と恥とつ類ヤリ

如黃香扇枕陸績

懷橘叔敖陰德子路負米之類
古者の
孝弟

かり人々おびゆる。黃香といつた。貧乏して蚊帳なかり。陸績は
母の爲に扇と持て蚊とけく。晝と志の。陸績は
つらハ客の座席。橘と般に贈りて懐中より
殺せ。叔殺ハ兩頭の蛇と殺。母おひ入り

只俗説の如して
便此道理と曉
久々に成熟
徳性自然の若
らん矣

明道程先生曰
子弟之輕俊

教者之憂
教者之憂
教者之憂
教者之憂

文字と作り
得ず子弟凡百
の玩好皆志と
奪

書札小至る儒
者の事に於て
最進然と一
向に好著すれ
能く志と喪
入用の品
著れ又志と喪

伊川程先生曰
教入未見意趣必

經典餘論

而頭と見よの必ず壽命を長くし只今母に別れ
の進くとてするも母問くその蠅ハ何處に在ヤ
叔放らるる他人の事と見ば。つらうも思ふ
て埋たりとつ。母の曰く。かやうに隱眞に功德と施
よの陽報とて。陽の福幸の報りふべしとつひに。果
してその進くとつれ。小兒ヤリ。又子路と
つらハ仲仕。宋儀と負て母と養育ける。母死て
後に立身して。高官となり。子路つひ
事ハ獨り。身とす。仲仕とす。母の無
事ハ方り。樂たれ。聖人も殊に賞美せられ。母の
性若自然矣。道理と曉して久。久。心
成熟。自然。性質
の徳とさる。性質

○明道程先生曰。憂子弟之輕俊者

只教以經學念書。明道先生の語。今の
世の子弟ハ不行儀

不得令作文字。詩作等。念
心。輕。又。俊。の。あり。の。心。念
憂。常に。聖賢の。經書。と。し。の。詩。作。等。と。の。念
に。篤。實。の。心。と。し。の。詩。作。等。と。の。念
ハ。心。氣。を。ま。り。在。と。し。の。詩。作。等。と。の。念

子弟凡百玩好皆奪志。好遊藝。凡百の玩
好。の。制。禁。と。し。の。詩。作。等。と。の。念

至於書札於儒者事最
進然一向好著亦自喪志。書札文章。手
跡の事ハ進く

伊川程先生曰。教入未見意趣必

經典餘論

經典餘論

未立意思と見未
 必す望と樂ハ
 不且之に歌舞と
 教ら欲す未渡
 古詩三百篇の如
 きの聖古人之と作
 關雎之類の如ハ
 家之正之始な
 り故に之を郷
 人に用ひ之を邦
 國に用て日に人
 に之を聞使

此等の詩其言
 簡奥みて今
 人未曉易く未
 別に詩と作て
 童子に灑掃應
 對長に事之節

不樂學欲且教之歌舞伊川先生仰けり人の

如古詩三百篇皆古詩の場と見つめて教るはよりたかり。古樂と見得ざるは學と願ふるなり。

人作之如關雎之類正家之始故用性情の正と得身

之鄉人用之邦國日使人聞之詩經三百篇の

此等詩其言簡奥今人未曉別欲内始ある關雎やいかに家と國野の交義正しとせり。依て國郷に用ひて日に人に聞之可也。

作詩畧言教童子灑掃應對事長之此の意味奥けは人未曉。顔子別に詩と作て。初と述はく。小學の教のおく。水と灑掃除とて。人と應對とて。年長とて。その節の。朝夕童子に歌りて道と學の助とす。

節令朝夕歌之似當有助詩ハ言簡くして

陳忠肅公曰幼學之士先要分別陳忠肅公曰。幼學之士。先要分別。人品之上下。何者是聖賢所爲之事。

人品之上下何者是聖賢所爲之事何者是下愚所爲之事。向善背惡去

彼取此此幼學所當先也陳忠肅公曰。幼學之時。學者の第一先とす。當心得あり。何都や。聖賢の所為や。何者や。思下や。何の所為や。人の品々上下の別と肝要とんべ。彼惡と去罷て此善と向取べ。とんべ。

未當二度

經典餘節

五

至未可學今之學者
人若為可今之學者
若不能此則知則
顏孟之事我亦亦
學可未三渡

言温かみ而氣和
言温かみ而氣和
言温かみ而氣和
言温かみ而氣和

過而能悔又不憚改
過而能悔又不憚改
過而能悔又不憚改
過而能悔又不憚改

埋鬻之戲俎豆
埋鬻之戲俎豆
埋鬻之戲俎豆
埋鬻之戲俎豆

幼自老に至りて
幼自老に至りて
幼自老に至りて
幼自老に至りて

為賢人今學者若能知此則顏孟之
事我亦可學道に志向し高き下り顔子孟

氣和則顔子之不遷漸可學矣言温而

過而能悔又不憚改則顔子之
不貳漸可學矣又過失を知て心に悔て改

埋鬻之戲不如俎豆念慈母之愛至
於三遷孟子幼少の遊戯に葬禮をたがひて死

幼至老不厭不改終始一意則我之
不動心亦可以如孟子矣幼少の心

志不高則其學皆常人之事語及顔
孟則不敢當也其心必曰我為孩童

夫志心と立て
高き下り若
則ち其學比常
人之事語及顔
孟に及ば則ち

敢て當不也其
心に必ず曰く我
の孩童為豈敢
て顔子孟之學ん
哉

此人に以て上と
語可ら不。先生長
者其卑下と見
豈肯之與語ん
哉。先生長者肯
て之與語ら不
則其與に語
所皆下等の人
也。(矣)

言不忠信不
下等の人也行
篤敬か下等の人
也。過而

悔と知不下等の
人も悔而改じと
知不下等の人
下等之語と聞下
等之事と為の譬
房舎之中に坐し
四面皆墻壁とら
如也。開明と欲
雖得可ら不矣

馬援が兄の子嚴
敦並に譏議と
喜て而して輕俠
の容に通ず

豈敢學顔子哉

常人の志向の立ちく身して
顔子孟子の語に必ず時ハ

此人不可以語上矣先生長
者見其卑下豈肯與之語哉先生長

者不肯與之語則其所與語皆下等
人也

言不忠信下等の人也行不
篤敬下等の人

也悔而不知改下等の人

語為下等之事譬如從坐房舎之中

四面皆墻壁也雖欲開明不可得矣

馬援兄子嚴敦並喜譏議而通輕

俠容

人の非と見ざる譏て評議といひ常一俠容
のものと交義と結し者皆輕薄の徒なり

援交趾ヲ在書ニ還シテ之ヲ誠シテ曰ク吾レ汝ノ曹ヲ聞ク人ノ過シ失ト聞ク父母ノ名ヲ聞ク如シ耳ヲ聞ク得ル可ク也ト口ヲ言フ得ル可ク也ト不レ欲ス也ト好シ人ノ長短とレ議論也ト安シ正法也ト是非也ト此レ五大にレ惡シ所也寧シ死ス子孫此レ行有聞ク願ス不レ也ト龍伯高敦厚周慎口無レ擇言無レ謙約節儉廉公節儉廉公威有吾レ之ト愛之之ト重シ汝ガ曹ヲ之レにレ效ス願ス也ト杜季良豪俠好義と好シ人ノ之ト憂ム人ノ之ト樂ム清濁無レ所失父ノ喪ニ容シ致シ數郡畢至吾レ之ト愛シ之ト重シ汝ノ曹ヲ之レにレ效ス願ス不レ也ト伯高不レ得ル猶爲謹教之士所謂刻鵠不レ成尚類鶩者不尚鶩類者

援交趾ヲ在書ニ還シテ之ヲ誠シテ曰ク吾レ汝ノ曹ヲ聞ク人ノ過シ失ト聞ク父母ノ名ヲ聞ク如シ耳ヲ聞ク得ル可ク也ト口ヲ言フ得ル可ク也ト不レ欲ス也ト好シ人ノ長短とレ議論也ト安シ正法也ト是非也ト此レ五大にレ惡シ所也寧シ死ス子孫此レ行有聞ク願ス不レ也ト龍伯高敦厚周慎口無レ擇言無レ謙約節儉廉公節儉廉公威有吾レ之ト愛之之ト重シ汝ガ曹ヲ之レにレ效ス願ス也ト杜季良豪俠好義と好シ人ノ之ト憂ム人ノ之ト樂ム清濁無レ所失父ノ喪ニ容シ致シ數郡畢至吾レ之ト愛シ之ト重シ汝ノ曹ヲ之レにレ效ス願ス不レ也ト伯高不レ得ル猶爲謹教之士所謂刻鵠不レ成尚類鶩者不尚鶩類者

援在交趾還書誠之曰吾欲汝曹聞人過失如聞父母之名耳可得聞口不可得言也好議論人長短是非正法此吾所大惡也寧死不願聞子孫有此行也此國に在りし書狀に之の事と誠シ也ト我レ父母ノ事ト聞ク如シ耳ヲ聞ク得ル可ク也ト口ヲ言フ得ル可ク也ト不レ欲ス也ト好シ人ノ長短とレ議論也ト安シ正法也ト是非也ト此レ五大にレ惡シ所也寧シ死ス子孫此レ行有聞ク願ス不レ也ト龍伯高敦厚周慎口無レ擇言無レ謙約節儉廉公節儉廉公威有吾レ之ト愛之之ト重シ汝ガ曹ヲ之レにレ效ス願ス也ト杜季良豪俠好義と好シ人ノ之ト憂ム人ノ之ト樂ム清濁無レ所失父ノ喪ニ容シ致シ數郡畢至吾レ之ト愛シ之ト重シ汝ノ曹ヲ之レにレ效ス願ス不レ也ト伯高不レ得ル猶爲謹教之士所謂刻鵠不レ成尚類鶩者不尚鶩類者

公有威吾愛之重之願汝曹效之今當名高龍氏伯高慎口無レ擇言無レ謙約節儉廉公節儉廉公威有吾レ之ト愛之之ト重シ汝ガ曹ヲ之レにレ效ス願ス也ト杜季良豪俠好義と好シ人ノ之ト憂ム人ノ之ト樂ム清濁無レ所失父ノ喪ニ容シ致シ數郡畢至吾レ之ト愛シ之ト重シ汝ノ曹ヲ之レにレ效ス願ス不レ也ト伯高不レ得ル猶爲謹教之士所謂刻鵠不レ成尚類鶩者不尚鶩類者

也效李良不得陷為天下輕薄子所
謂畫虎不成反類狗者也

也效李良不得陷為天下輕薄子所
謂畫虎不成反類狗者也
謹教サリ士ノカクシ世間に所謂セリ言の如ク鶴の
鳥と刻て成そんトヤンてウテ、驚とハヤストヤリ李良
の如ク一際ありて心の烈操場所と效えんとて輕薄
の場に陥入ト是れ世にハ虎と西ガんと却て
狗に類トモトモ

漢の昭烈將終勅後主曰勿以惡小
而為之勿以善小而為帝

漢昭烈將終勅後主曰勿以惡小
而為之勿以善小而為帝
劉禪ハ勅の遺言めせたる凡人の心トて此ハ
好トトシテ遂々する時その理の善惡のトモ
トシハありて微心の為に義理の心トトシテ致
サリ是ハ惡トトシテ小のトトシテ致サリハ
必ず戒めて慎ミテ是ハ善トサレトモ小キ事
サレトモ為ルル必ズ止ミテ是ハ不持トシ

諸葛武侯戒子書曰君子之行靜
以修身儉以養德非澹泊無以明志
非寧靜無以致遠夫學須靜也才須
學也非學無以廣才非靜無以成學

諸葛武侯戒子書曰君子之行靜
以修身儉以養德非澹泊無以明志
非寧靜無以致遠夫學須靜也才須
學也非學無以廣才非靜無以成學
武侯ハ諸葛孔明ヤリ子孫を戒メる書に曰ク
君子の行ハ靜ヤリ儉ヤリ夫ハ才の深ク
身修ムルガ人、人情驕テ德養ムルガ人、
澹泊ユテ士心向モ明コトシ深ク致
スルル静ヤリ學ハ深ク學ハ深ク
真の才トトシテ立ガリ

能研精險躁則不能理性年與時馳

惛慢則不能研精

能研精險躁則不能理性年與時馳

惛慢則不能研精

と理...能...年
時與馳意歲與
去て遂に枯落と
成る窮廬に悲歎
す...將復何及
ん也

意與歲去遂成枯落悲歎窮廬將復
何及也
心悵慢みて、理と精研し、年がたれば、理の體に後つる枯落するて困窮の廬に悲歎す、及ぶるに及ばず

柳玘嘗て書し著
其子弟に戒めて
曰く名を壞已と
災いと喪其失
尤大者者五宜
く深くと誌宜
宜に渡
其自安逸と
求澹泊と時す

○柳玘嘗著書戒其子弟曰壞名災
已辱先喪家其失尤大者五宜深誌
唐の柳玘といふ人子弟の爲に家の訓と立てて曰く凡て名と下し壞已身に災過と仕出先祖を辱し家と失ふものありもの其自安逸と求澹泊と時す

其二儒術と知不
古道と悦ぶ不
經に情而耻不當
世と論而願と解
身既に知し寡
人の學有と惡
其二已に勝者之
厭ふに依る者之
唯戲談と
樂て古道と思
人之善と聞
人之惡と聞
之揚頗僻に浸
積る徳義を銷
簪裾徒在廝
養何殊

其二不知儒術不悅古道
情前經而不耻論當世而解願身既
寡知惡人有學
二に古の道儒書の術と悦ぶ世の學問あるといふ惡む 其三勝已
者厭之依已者悅之唯樂戲談莫思
古道聞人之善嫉之聞人之惡揚之
浸漬頗僻銷刻德義簪裾徒在廝養
何殊
勝る人と厭依諛ふの好つるに戲れと談す

其四優游と崇
と好。麴蘖と耽り
嗜。杯を以て嗜し以
て高致く爲。事と
勤を以て俗流と
爲。之に習ハ荒
易。覺見が已
悔難

其五
權要に匿進
一資半級或ハ
之と得。雖ハ
衆怒群猜存
者。鮮
余名門右族と見
に祖先の忠孝

勤儉に由て以て
之と成立せ不し
莫。子孫の頑率
奢倣に由て以て
之と覆墜せ不し
莫。成立之難
天に外。如覆墜
之易。如燎毛言
如。之と言。心と
痛。爾宜
體に刻宜。宜。度

范魯公質。宰相
爲。從子。果嘗
て奏。て秩。と遷
て。求。質。詩
と作。て。之。と。略。す
其略に曰く

とハ揚て。之。頑僻に。心。と。浸漬て。心。の。徳義ハ。鋪
刻。て。之。ハ。人。ハ。た。く。冠。と。之。ハ。き。簪。と。之。ハ。裾。と

張。て。高。位。に。あ。り。て。廩。養。の。り。れ。に。殊。々。其。四。崇。好
ず。之。廩。ハ。薪。と。之。ハ。養。ハ。飯。と。之。ハ。の。り。り。其。四。崇。好

優游。耽嗜。麴蘖。以。啣。杯。爲。高。致。以。勤

事。爲。俗。流。習。之。易。荒。覺。已。難。悔

遊。之。ハ。崇。好。と。麴。蘖。に。耽。り。嗜。之。數。杯。ハ。便
け。脚。と。高。致。と。職。事。の。勤。と。俗。流。と。之。ハ。思

て。心。荒。て。善。事。ハ。習。が。く。其。五。急。於。名。宦

匿。進。權。要。一。資。半。級。雖。或。得。之。衆。怒

群。猜。鮮。有。存。者。五。に。名。有。官。祿。と。之。ハ。宦。を
一。資。半。級。と。得。て。之。ハ。傍。輩。の。猜。余。見。名。門。右

族。莫。不。由。祖。先。忠。孝。勤。儉。以。成。立。之

莫。不。由。子。孫。頑。率。奢。倣。以。覆。墜。之。成

立。之。難。如。外。天。覆。墜。之。易。如。燎。毛。言

之。痛。心。爾。宜。刻。骨。先。祖。忠。孝。の。勤。儉。以。成。立

之。痛。心。又。家。と。覆。墜。と。大。く。子。孫。の。頑。率。奢。倣。以
て。起。て。之。ハ。何。事。に。由。て。成。立。と。難。難。覆。墜。と。之。ハ

と。燎。毛。の。速。さ。の。如。き。事。と。思。ふ。が。心。に。痛。し。と。之。ハ。爾。等。體。に。刻。て。亡。心。す。と。之。ハ

范魯公質爲宰相從子果嘗求奏

遷秩質作詩曉之其略曰

宋の代に范魯公質の

宰相の從子なり果嘗て天子に果嘗て奏聞せんと

魯公へ致るん求ける魯公その理に當るると詩に作すく曉たすふら此詠と朱子賢くみるに記する

戒爾學立身莫若先孝弟怡怡奉親

長不敢生驕易戰戰復兢兢造次必

於是親に孝心して年長に弟を敬ふ親

戒爾學干祿莫

若勤道藝嘗聞諸格言學而優則仕

不患人不知惟患學不至

禮自界而尊人先彼而後己相鼠與

茅鴟宜鑑詩人刺

戒爾遠耻辱恭則近乎

士周孔垂名教齊梁尚清議南朝稱

八達千載穢青史

戒爾勿嗜酒狂

藥非佳味能移謹厚性化爲凶險類

戒爾學立身と立身と學に孝弟と先
す小若魯公の怡怡
親長に奉
敢驕易と生で不
戰戰復兢兢造
次必是に於て
戒爾學干祿莫
と學の道藝と
勤ふ小若魯公
嘗聞諸格言
學而優則仕
人
の知不と患不惟
學の至不と患
問の至不と患

戒し爾耻辱に遠
く恭まて則ち
禮に近自卑して
而て人と尊彼と
先し而て己後己
相鼠と茅鴟與宜
く詩人の刺と鑑
宜乎宜三度
戒し爾放曠るる
勿放曠るる端士
に非周孔名教と
垂齊梁清議と
尚南朝に八達
千載穢青
史と穢
戒し爾酒と嗜
狂
藥非佳味能移
謹厚の
性化爲凶險
類

の録と為古今傾敗者歷歷皆可記

戒心雨多言の衆の

慎み不災厄此

譽の間適に身

世と舉て承奉

音氣と増知不

以て玩戯と為

所以に古人疾

世と舉て游俠

と重し俗呼て

氣義と為人の

仕往囚繫に陥

所々に馬援が書

殷勤に諸子と戒

古今傾敗者歷歷皆可記酒心と狂す

世味とわづらふに盡く厚性質くく凶險す戒心

勿多言多言衆所忌苟不慎極災

厄從此始是非毀譽間適足為身累

多言つゞく衆の思慮さうり誠に災厄起し身の累煩とる依て人の是非といふ物の譽

舉世重交游擬結金蘭契

忿怨容易生風波當時起所以君子

心注汪淡如水世の人とく俄に交遊

舉世好承奉昂昂增意氣不知承奉

者以爾為玩戲所以古人疾遽條與

戚施又今の世舉已身と奉養

舉世重游俠俗呼為氣義為

人赴急難往往陷囚繫所以馬援書

殷勤戒諸子又游俠と好て世俗

舉世賤清素奉身好華侈肥馬衣輕

世と舉て清素

と賤身に奉に

世と舉て清素

と賤身に奉に

世と舉て清素

と賤身に奉に

華侈と好肥馬
つて輕裘と衣揚
揚つて閭里と
過市童の隣
還て識者の鄙
爲

我本羈旅の臣
堯舜の理に逢
に遭りも位重
才充不戚戚
深淵と薄氷與
之と踏唯墜
恐爾の曹當に
我と憫む當罪
庶と増使勿
當

門と閉て蹤跡と
歛首と縮て名勢
と避
居難畢竟何
時に足と物盛
則ら必と衰
隆とあれ還替
有速ふ成堅牢
やん亟ふ走多
顛躓す

灼灼と園中の花
蚤發し還先萎遲
遲り澗畔の松
贊贊として晚翠と
念日命と賦て疾徐
有靑雲が致難
寄語て諸郎に謝
す躁に進徒爲耳

表揚揚過閭里雖得市童憐還爲識

者鄙今の人おぬけり華侈と好して清素を好む

輕裘とよれて復ハ越後久ハ羽二重と著

我本羈旅臣遭逢堯

舜理位重才不充戚戚懷憂畏深淵

與薄氷踏之唯恐墜爾曹當憫我勿

使増罪戾魯公ふらうの詞なり我本羈旅

御代に遭て當今身重位ふあれ才充不充也

に罪戾と増しめざるにあらば

閉門歛蹤

跡縮首避名勢勢位難久居畢竟何

足恃物盛則必衰有隆還有替速成

不堅牢亟走多顛躓爾曹つみに要用の外

人の毀やうに蹤跡と捕らぬ工夫と

前と縮て名聞戚勢と避け避るべし執勢位ハ久しく無事に

隆盛かれ是非に衰替かり時とあれ世のな

灼灼園中花蚤發還先萎遲

遲澗畔松鬱鬱含晚翠賦命有疾徐

靑雲難力致寄語謝諸郎躁進徒爲

耳春に灼々園の花ハ蚤萎くやう澗畔に生ざる枝

驚々々々、小千年の晩翠、と念真、その如く、人の禍福、
 吉凶、始より天の命、數定まり、賦て、疾あり、餘の、殊に、
 加ふる、小青、雲人、よ、ハヤリ、ク、知、ベ、ハ、カヤリ、に、奇、語、
 して、ふも、諸郎の、利欲の、望に、謝、ふ、返、ぐ、も、躁、て、
 進、く、ハ、術、為、く、
 さ、し、る、ふ、ま、り、り、

康節邵先生子孫、
 に戒りて曰く、上品之人、
 人、教、不、て、而、
 善、中品之人、
 教、て、而、後、に、善、
 下品之人、
 亦、善、不、教、
 不、て、而、善、
 聖、に、非、て、而、何、
 教、て、而、後、に、善、
 賢、に、非、て、而、
 何、教、て、亦、善、

○康節邵先生戒子孫曰。上品之人
 不教而善。中品之人。教而後善。下品
 之人。教亦不善。不教而善。非聖而何。
 教而後善。非賢而何。教亦不善。非愚
 而何。邵康節先生の曰く、教や、く、し、善、き、ハ、上、品、
 の、人、と、聖、人、ナリ、教、と、く、後、に、善、ま、る、
 ハ、中、品、の、人、と、賢、人、ナリ、教、て、善、く、
 下、品、の、人、と、愚、者、ナリ、と、是知善也。

吉者、目、に、非、禮、之、
 色、と、觀、不、耳、に、非、
 禮、之、聲、と、聽、不、
 非、禮、之、言、と、道、
 不、足、に、非、禮、之、地、
 不、踐、不、人、善、に、非、
 非、交、不、物、義、に、
 非、取、不、賢、に、親、
 芝、蘭、に、避、如、
 亞、心、と、避、蛇、蝎、と、
 畏、如、始、或、之、と、
 吉、人、と、謂、不、曰、
 則、ち、吾、ハ、信、不、
 也、也、

者吉之謂也。不善也者。凶之謂也。
 禮之色。耳不聽。非禮之聲。口不道。非
 禮之言。足不踐。非禮之地。人非善。不
 交。物非義。不取。親賢。如就芝蘭。避惡
 如畏蛇蝎。或曰。不謂之吉人。則吾不
 信也。吉人の行狀、ハ、く、と、バ、凡、て、目、に、視、耳、に、
 聴、口、に、言、足、に、踐、に、つ、り、ま、で、非、禮、を、
 ハ、め、ぐ、る、べ、く、バ、善、人、に、ナ、リ、不、義、ヤ、る、物、ハ、取、
 る、賢、人、と、慕、ふ、芝、蘭、の、香、と、く、如、く、惡、事、
 一、ハ、蛇、蝎、と、恐、る、如、く、カ、レ、ガ、ヤ、リ、の、人、ハ、た、く、
 吉、人、と、謂、ぶ、人、あ、ら、ば、信、不、と、ヤ、リ、

之と榮とす諸君
 何ぞ君子と為不
 又曰く其善なり
 所と云ふ其善なる
 所と行ひ其善なる
 所と思ふ此の如
 くして而して君子
 と為不未之有
 未也其不善と
 言ふ其不善を行
 ひ其不善を思ふ
 此の如くして而して
 小人と為不未
 之有未也未と
 胡文定公の子に與
 る書に曰く志を以て
 立てて明道希文と
 以て自期待

又曰言其所善行其所善思其所善
 如此而不為君子未之有也言其不
 善行其不善思其不善如此而不為
 小人未之有也
 君子と云ふは君子と云ふの道あり
 常心に心におもひて皆善なり君子と云ふ
 此三事逆違ふは小人と云ふのなり
 ○胡文定公與子書曰
 胡文定公は宋朝
 に承りて立志以明道希文自期待
 立てて明道希文と稱先生にありたりと
 期待あり大儒と忠臣と云ふなり

心と立たに忠信
 不欺と以て
 初と為已と行
 端莊清慎と以
 て操執と見
 事に臨み明敏果
 斷と以て是非と
 辨へ又三尺と謹
 立てて之意と考
 求して而して之と
 操縦が斯に政と
 為人の後には不
 可矣
 汝勉之勉哉心と
 治身と脩身と
 飲食男女と以て切
 要と為

以忠信不欺為主本
 行已以端莊清慎見操執
 謹三尺
 斯可為政不在人後矣
 汝勉之哉治心脩身以飲食男女為
 切要
 心と立たに忠信と云ふは、人として欺くことなきこと、
 不欺と云ふは、初めから己の行を端莊清慎と云ふは、
 端莊清慎と云ふは、操執と云ふは、
 事に臨み明敏果斷と云ふは、
 斷と云ふは、是非と辨へ又三尺と云ふは、
 立てて之意と考求して而して之と云ふは、
 操縦が斯に政と為人の後には不可矣と云ふは、
 汝勉之勉哉心と治身と脩身と飲食男女と以て切要と為と云ふは、
 汝勉之勉哉心と治身と脩身と飲食男女と以て切要と為と云ふは、
 汝勉之勉哉心と治身と脩身と飲食男女と以て切要と為と云ふは、

古從聖賢這裏
自工夫と做し其
忽せにす可けん乎

古靈の陳先生僊
居令と為其民に
教て曰く

吾民と為者へ父
ハ載に母ハ慈に思
ハ友に弟ハ恭に子
ハ孝に夫婦恩有

男女別有
子弟有學有鄉閭
禮有

貧窮患難ハ親
戚相救

農事と墾ハ無
盜賊と作ハ無賭
博と學ハ無争

無以善と陵
無以富と貧

行者讓路耕者讓畔
白者不負戴於道路

則為禮義之俗矣

從古聖賢自這裏做工夫其

可忽乎

古靈陳先生為僊居令教其民曰

為五民者父義母慈兄友

夫婦有恩

男女有別

子弟有學

貧窮患難親戚相救

婚姻死喪隣保相助

無墾農業無作

盜賊無學賭博無好争

無以惡陵

無以富貧

行者讓路耕者讓畔

白者不負戴於道路

則為禮義之俗矣

禮義の民といふを

右立教と廣む

右廣立教

前にある立教の
意と廣むるなり

小學卷之五終

小學卷之六

司馬溫公曰

凡諸卑幼

事大小無專

行やと得て母

必を家長に咨稟

せよ凡子父母之

命と受て必が

籍記し而して之

と佩時に省を

而して速ふ之と

行ふ事畢とも

命を返す

司馬溫公の語なり凡
事大小無專
行やと得て母
必を家長に咨稟
せよ凡子父母之
命と受て必が
籍記し而して之
と佩時に省を
而して速ふ之と
行ふ事畢とも
命を返す
於焉
或ハ命ナク
不可
則
待
父母
之
許
然
後
改
之
若
不
許
苟
於

害之真ありて而して之と白し父母之許と待て然して後之と改り若許不苟事に於て大に言無者亦當に曲に從ふ當若父母之命と以て非して而して直に己の志を以て行を執所皆是なり雖不順之子と爲況や未必ずしも是る未乎當未 兩渡

横渠先生曰く、親之親に事て

事無大害者亦當曲從若以父母之命爲非而直行已志雖所執皆是猶爲不順之子況未必是乎

此れ其の柔和なる自のめぐりてこれに非ざる言道理との、父母の許するとなつて外用と改むるを、一又許するも害あるを委曲に從ふべし、萬一父母の命と非ずして、己の志向とありて、たたく是とに當たり、不順なる子と、賤むるなり、況て是るなき論なり、○此事今の世にて、田舎ふれど繁華の都に、はがやうの心持と、人のすくれ、嫁と、なりて他家へゆくもの、別て、こころを、不孝不母のこころと、

○横渠先生曰く、舜之事親有不悅者

爲父頑母嚚不近人情若中人之性

其愛惡若無害理必姑順之

舜の大孝なり、兩親に喜悅と受ざる、父母の愛惡、若くは、今日通用人の父母好む惡む、若親の禪居、いふ、より、あまりに、人情に、わたり、

之故舊所喜當極力招致賓客之奉

當極力營辦務以悅親爲事

不可計家之有無然又須使之不知

其勉強勞苦苟使見其爲而不易則

悦がれ不く有者父頑に母嚚に人情に近く不爲中人之性の若く其愛惡理と害する、無が若んば必ず姑之に順、親之故舊喜其所の若、當に力と極て招致當賓客之奉、當に力と營辦、當に計、不可、然、又、

家人の無と計、不可、然、又、

須く之とて其の勉強勞苦を知らず不使須苟其為て而て易く不と見せ使へ則ち亦安て不(須)兩渡(矣)

羅仲素著賤豫と底而天下之父子為者定と云ふと論して云く只天下に不是底の父母無か底なり

了翁聞て而て之と善として曰く唯此の如にして而て後天

下之父子為者定彼臣其君と弑し子其父と殺し常に其不是の處有と見始(於)伊川先生曰く病て床に附と之と庸醫に不孝に比す親に事する者亦不可(於)醫と知(不可)ある可(於)

亦不安矣 入用の有と無と計りかきりまぬ強く入る苦勞のほげとて父母のあつたやうにあつてその事の爲不易と知了たすれど却て父母のこころを疑

○羅仲素論替賤底豫而天下之爲父子者定云只爲天下無不是底父母

羅仲素といふ人の論に舜の孝心と頑鬻父の替賤も豫意とあるは天下の父子に在りて恩愛道に在るは是れとて天下の間父母の不是といふは是れに依りて天下の行をなすも了翁聞て善之曰唯如此而後天下之爲父子者定彼臣弑其君子弑其父常始於見其有不是處耳

○伊川先生曰病卧於床委之庸醫比之不慈不孝事親者亦不可不知

伊川先生曰やうの今日父母床に卧たすは庸醫に委ると不慈不孝に比す親に事する者亦不可不知 庸醫に委ると不慈不孝に比す親に事する者亦不可不知 庸醫に委ると不慈不孝に比す親に事する者亦不可不知

横渠先生嘗曰事親奉祭豈可使
祭に奉て親に事へ
に之と爲使可
んや

伊川先生曰冠昏喪祭禮之
冠昏喪祭禮
之大者者なり
今の人都是
理會せ不豺獭
皆本と報ずる
と知今士大夫の
家多此に勿心
奉養に厚て而
先祖に薄と
甚不可也

某嘗て六禮の
大略と脩の家
に必大廟有り
廟に必主有
月朔に必
新しき薦時
祭に仲月と
用冬至と始
祖と祭立春に
先祖と祭季
秋と祭思
日と主と遷
正寢に祭凡死
に事之禮
當に生に奉ず
者も厚す當
於

大略家必有廟廟必有主月朔必薦
新時祭用仲月冬至祭始祖立春祭
先祖季秋祭禰忌日遷主祭於正寢
凡事死之禮當厚於奉生者
冠昏喪祭と郷の飲酒と大夫士相見の六禮
と脩成て大畧をとつとつり家と先祖と祭廟所
ありとの廟中と神主とつり朔日と新物と
薦四時の祭と仲月と用冬至と十一月の中と一陽
の生する日と依て宗族の大始祖の神と祭
せり立春の物の生する月と我先祖と祭せり
高祖より前々皆あつて祭とせり季秋の物の成
就の月と父と祭せり禰父の廟なり今先
祖と一所なり正當の心用ひて正寢の真中へ請
て祭せりとて生の世より禮敬と盡くつと

○横渠先生嘗曰事親奉祭豈可使
人爲之
大に道理に
あり

○伊川先生曰冠昏喪祭禮之大者
今人都不理會豺獭皆知報本今士
大夫家多忽此厚於奉養而薄於先
祖甚不可也
始冠昏喪祭禮人
の禮せりとつり今の世理會
とん思と報ずるまりとあり況て士大夫の家は
後と忽るふつと非道なり

大略家必有廟廟必有主月朔必薦
新時祭用仲月冬至祭始祖立春祭
先祖季秋祭禰忌日遷主祭於正寢
凡事死之禮當厚於奉生者
冠昏喪祭と郷の飲酒と大夫士相見の六禮
と脩成て大畧をとつとつり家と先祖と祭廟所
ありとの廟中と神主とつり朔日と新物と
薦四時の祭と仲月と用冬至と十一月の中と一陽
の生する日と依て宗族の大始祖の神と祭
せり立春の物の生する月と我先祖と祭せり
高祖より前々皆あつて祭とせり季秋の物の成
就の月と父と祭せり禰父の廟なり今先
祖と一所なり正當の心用ひて正寢の真中へ請
て祭せりとて生の世より禮敬と盡くつと

人家能此等
の事數件と
存得幼者
雖漸に禮義
と知使可

神明やるが
人家能存得此等事數件雖
幼者可_レ使漸知禮義
家くまれ件
禮義の事と

司馬溫公曰く
冠者成人之道
也成人者將に
人の子と為人の
弟と為人の臣と
為人の少と為者
者行ひと責と將
也將に四の者之
行ひと人に責と將
其禮重せ不可
與將に於
冠禮之廢

○司馬溫公曰冠者成人之道也成
人者將責爲人子爲人弟爲人臣爲
人少者之行也將責四者之行於人
其禮可不重與始冠の禮ハ成人
子弟臣下少者と責べと成人と成
之廢久矣近世以來人情尤爲輕薄

近世以來
人情尤も輕薄
なりと爲子と生て
猶乳と飲に已
に巾幘と加官
有者ハ或ハ之
爲に公服と
製之而之
と弄ぶ十歳
と過す猶總
角なる者蓋鮮
彼責に四の者
之行と以す
豈能之と知ヤ

生子猶飲乳已加巾幘有官者或爲
之製公服而弄之過十歳猶總角者
蓋鮮矣彼責以四者之行豈能知之
近世ハ其禮廢るも人情も輕薄に
の時より冠服に用ふる巾幘と加す
公服と製して弄ぶ
義理と
故往往自幼至長愚駭如
一由不知成人之道故也
人々往往
冠然世俗之弊不可猝變若敦厚好

古禮二十有五而冠
冠すこと稱すも雖も然るも世俗之弊粹に變す可く不敦厚古好之君子の若ハ其子年十五以上並孝經論語に通下粗
禮義の方を知りて然るに冠風ハ其美
 斯其美矣
古の禮葬ハ今も粹變す可く敦厚ハ古の好之君子の若ハ其子年十五以上並孝經論語に通下粗

古之君子俟其子年十五以上能通孝經論語粗知禮義之方然後冠之斯其美矣
古の禮葬ハ今も粹變す可く敦厚ハ古の好之君子の若ハ其子年十五以上並孝經論語に通下粗
 古者父母之喪既殯食粥齊衰疏食水飲不食菜菓
喪中の禮ハ粥ハ齊衰の服母ハ齊衰の服と著するに置たり其入棺するの三日ハ食事とつとまざ三日の親類のすくふより食する外ハ飲食用はつとまざ又齊衰ハ母の為に三年服すべしと除て只一年服する疏ハ水と飲ばらむ他の飲食はつとまざ野菜はつとまざ
 父母之喪既虞卒哭疏食水飲不食菜菓
喪中の禮ハ粥ハ齊衰の服母ハ齊衰の服と著するに置たり其入棺するの三日ハ食事とつとまざ三日の親類のすくふより食する外ハ飲食用はつとまざ又齊衰ハ母の為に三年服すべしと除て只一年服する疏ハ水と飲ばらむ他の飲食はつとまざ野菜はつとまざ

父母之喪既虞卒哭
虞卒哭ハ喪の既葬後ハ
 疏食水飲不食菜菓
疏食ハ粥也水飲ハ水と菜菓ハ菜と菓と
 期而小祥
期ハ一周年也小祥ハ二周年也
 又期而大祥
大祥ハ三周年也
 禫而禫
禫ハ禫祭也禫而禫ハ禫祭を二回す
 始飲酒
始ハ初也飲酒ハ酒を飲ぶ
 先食乾肉
乾肉ハ乾肉也
 古人喪居
喪居ハ喪中に居る
 無敢公然食肉飲

父母之喪既虞卒哭
虞卒哭ハ喪の既葬後ハ
 疏食水飲不食菜菓
疏食ハ粥也水飲ハ水と菜菓ハ菜と菓と
 期而小祥食菜菓又期而大祥食醯醬中月而禫禫而飲醴酒始飲酒者先飲醴酒始食肉者先食乾肉
期ハ一周年也小祥ハ二周年也大祥ハ三周年也醯醬ハ醯と醬と中月ハ中月也禫ハ禫祭也醴酒ハ醴酒也始飲酒ハ初飲酒也始食肉ハ初食肉也先食乾肉ハ先乾肉を食す也
 古人喪居無敢公然食肉飲
喪居ハ喪中に居る無敢公然ハ敢て公然とせず也食肉飲ハ食肉と飲酒

肉と食し酒と飲者無

漢の呂邑王昭帝の變に奔道に居て素食せし霍光其罪と數し而して之を廢

晉阮籍ホト何曾面あり籍と文帝の坐に簡て日く郷俗に敗之人長とす可く不也

因て帝に言て日く公方に孝と以て天下を治而に阮籍が重哀と以て酒と飲肉と食すと公の坐に聽す宜く四裔に擯して華夏と汚染せ令る無宜(宣)三度

宋の廬陵王義真武帝の憂に居て左方に厨帳珍羞を買使齋内

酒者 酒肉をたぐはし 漢呂邑

王奔昭帝之喪居道上不素食 霍光

數其罪而廢之 漢の昭帝崩し霍光其罪と數し而して之を廢し

晉阮籍 負才放誕居喪無禮何曾面質籍於文帝坐曰郷敗俗之人不可長也

文帝坐曰郷敗俗之人不可長也 阮籍俗に敗之人長とす可く不也

以孝治天下而聽阮籍以重哀飲酒 因て帝に言て日く公方に孝と以て天下を治而に阮籍が重哀と以て酒と飲肉と食すと公の坐に聽す宜く四裔に擯して華夏と汚染せ令る無宜

食肉於公坐宜擯四裔無令汚染華 夏 因て帝に言て日く公方に孝と以て天下を治而に阮籍が重哀と以て酒と飲肉と食すと公の坐に聽す宜く四裔に擯して華夏と汚染せ令る無宜

夏 因て帝に言て日く公方に孝と以て天下を治而に阮籍が重哀と以て酒と飲肉と食すと公の坐に聽す宜く四裔に擯して華夏と汚染せ令る無宜

宋廬陵王義真居武帝憂使左右 武帝の憂に居て左方に厨帳珍羞を買使齋内

買魚肉珍羞於齋内別立厨帳會長 珍羞を買使齋内

史劉湛入因命膳酒炙車螯 時御子廬陵王齊戒が珍羞魚肉と

驢車整と多と

湛色と正と

此設有宜と

不義真と曰く且

甚寒長史事

一家に同望と

異と為不酒至

湛起て曰く既に

禮と以て自處

能不宜と

隋の煬帝太子

皇后の喪に居朝

毎に二溢米と進

令而私に外

取て竹筒の中

に置蠟と以口と

閉衣襖に裹て

之と納令

湖南の楚王馬

希聲其父武

穆王と葬之

日猶雞臠と食

其官屬潘起

之と譏て曰く

昔阮籍喪て

居て蒸臠と食

何の代か賢無

然則五代之

時喪に居て肉

と食者人猶以

一命を以て

長史官のやく

劉湛と

湛正

色曰公當今

不宜有此譏

義真曰且

其寒長史事

同一家望不

為異酒至

湛起曰既不

能以禮自處

又不能以

禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

以禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

以禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

以禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

以禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

以禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

以禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

以禮處人

劉湛色と

湛起て曰く

當今の

長史

一家に同望

不為異酒至

湛起て曰く

既不能以禮

自處又不能

て異事と云ふ是
流俗の弊其來
甚矣今之士
大夫喪に居て
肉と食と酒と
飲と平日に異
無と相從て
宴集醜然
愧無人
亦怪て怪と為
不禮俗之壞
習て以て常と為
悲ひ夫也
乃鄙野之
未飲未親實
則醜
小名

也今之士大夫居喪食肉飲酒無異
平日又相從宴集醜然無愧人亦怪
不為怪禮俗之壞習以為常悲大
五代の時人々異るるにみゆひく見ゆひ
流俗の弊醜然と云ふ只今や
大夫と人々酒宴肉食と云ふ常のく醜然
實に禮義やぶる常乃至鄙野之人或初
喪未飲親賓則齋酒饌往勞之主人
亦自備酒饌相與飲啜醉飽連日及
葬亦如之
況て鄙野に親賓酒饌と云ふ主人も

主人も亦自
酒饌と備相與
に飲啜醉飽
連日葬を及て
亦之の始末に渡
甚と云ふ者初
喪に樂と作て
以て尸を娛む
殯葬に及て則
車と導び而
號泣せ之に隨
亦喪に乗て即
嫁娶する者存
習俗之變難
愚夫之曉難及
凡父母之喪に

其者初喪作樂以娛
尸及殯葬則以樂導輜車而號泣隨
之亦有乘喪即嫁娶者噫習俗之難
變愚夫之難曉乃至此乎
尸都と云ふ又その中に號泣のあり是
樂と云ふ又その中に號泣のあり是
豊に云ふ餘は無禮と云ふ人の中にも喪中に依
て相續やと云ふ嫁娶と云ふあり識世の
習俗の變るる致さるる人思
凡居
父母之喪者大祥之前皆未可飲酒
食肉若有疾暫須食飲疾止亦當復

居者の大祥之
前皆未酒之
肉と食ナ可未
者疾有暫須
らく食飲す須
疾止亦當初
に復當小素食
咽に下と能久
而贏備疾と
成こと恐者看
肉汁及脯醢或
肉少許と以
其滋味と助可
恣に珍羞盛
饌と食及人
與燕樂す可
不是則衰麻
と被と雖其實

初必若素食不能下咽久而贏備恣
成疾者可以肉汁及脯醢或肉少許
助其滋味不可恣食珍羞盛饌及與
人燕樂是則雖被衰麻其實不行喪
也 凡て兩親の喪中大祥つら酒肉ハ禁制
ナド一病疾にあらざる食する一平復せば本の
つらとつらへ一素飯と食して咽に通ぐ贏備
疾より出べしとあらざる肉の汁又ハ脯醢がど
食すべし少許の滋味ともゆるぎをかりて
に珍羞の酒饌とつらたつらとなく衰麻著
つらつらと實ハ喪中の事 唯五十以上血
氣既衰必資酒肉扶養者則不必然

喪行不也
唯五十以上血
氣既衰必資
酒肉に資扶養
ふ者ハ則ち以て
然不耳其喪に
居て樂と聽及
嫁娶する者ハ國
に正法有此に復
論せ不
父母之喪に中
門の外に樸陋
之室と擇て夫
之喪次と為斬
衰一室に寝塊
不脱下人與坐
不也

耳其居喪聽樂及嫁娶者國有正法
此不復論 酒肉とつらつらと扶養するハ
必ず然とて夫ハ喪中の事 父母之喪
中門外擇樸陋之室爲丈夫之喪次
斬衰寢苦枕塊不脱絰帶不與人坐
焉 父母の喪中中門と大門との間に樸陋
之室と擇て丈夫の喪次室とて寝塊
不脱下人與坐不也 父母の喪に中門の外に樸陋
之室と擇て夫之喪次と爲斬衰一室に寝塊
不脱下人與坐不也 父母の喪に中門の外に樸陋
之室と擇て夫之喪次と爲斬衰一室に寝塊
不脱下人與坐不也

婦人の中門之内の別室に次いで帷帳衾褥華麗之物と撤去男

子故無中門不入不婦人輒男子の喪次に至ると得ん(不) 晋の陳壽父の喪に遭疾有婢とて

賤議と為是る坐に沈滞坎珂身を終嫌疑之際慎不うる可ら

父母之喪にハ當に出出若くハ不喪事及故有ハ為に已しと得ん而も出若くハ則て樸馬に乗布褙響と響(當)に渡

帷帳衾褥華麗之物男子無故不入中門婦人不得輒至男子喪次婦人ハ

別室に居て帷帳衾褥の撤去ハ男に格別の故ありてその内へ入らば晋陳壽遭父喪有疾使婢丸藥

客往見之郷黨以為賤議坐是沈滞坎珂終身嫌疑之際不可不慎代の

時陳壽といふもの喪中疾ありて舞女に藥を尅どもありける男子の客一人入りていける人こゝろに依りて郷黨の評議ありて賤とせらるるに依りて終身あざむ沈滞坎珂て世に出らざるを嫌疑

父母之喪不當出若為喪事及有

故不得已而出則乘樸馬布褙鞞響凡て喪中よ其出らざるべしと云ふは喪のついでに樸馬に乗布褙鞞響と響(當)に渡

世俗信浮屠誑誘凡有喪事無不

供佛飯僧云為死者滅罪資福使生

天堂受諸快樂不為者必入地獄判

燒春磨受諸苦楚遊來浮屠に誑誘するもの

燒春磨受諸苦楚遊來浮屠に誑誘するもの

の苦楚と受と殊て知不死者形既に朽滅し神已に飄散す劉焼春磨有し雖も胎施す所無又况佛法未中國に入未之前人固死せ而復生者何故都一人誤入地獄と謂十王者耶此其無有而不足

信也明矣夫く右の磨春ありて施すも形自り照す後漢の代あり其て數千年の間の人々死して又生する人々なく漢書に云く漢書に云く 而復生者何故都無一人誤入地獄 見所謂十王者耶此其無有而不足

是と以て信す此の論は此と論じてこれ教はたす 夫は此と論じてこれ教はたす 夫は此と論じてこれ教はたす 夫は此と論じてこれ教はたす 夫は此と論じてこれ教はたす 夫は此と論じてこれ教はたす

如來の法の音を佛理してしかるに脇道入り入に依
て右の社命なり○天然ハ西域よりてこの居旅
法度と稱するの地を掘て入と地獄の名づるもの
土の土牢石塊漬の類なり閻羅十王の司刑獄
敷の官各なり春磨剎魔なり異なり天
朝唐土大抵同例のそらかこなり夜叉羅刹等
ハ近鄰の夷ふなり罪あるものを放逐たせり
是等書とてこの世の知とせられ又説法と立て
られ世を死して後別にかきく國へゆく

顔氏家訓に曰
吾家巫覡符
章言議と絶汝
曹見所なり妖
妄と為し勿

○顔氏家訓曰吾家巫覡符章絶於
言議汝曹所見勿為妖妄
北朝の臣に
顔之推とて

見聞の如くかりと子第へ示し
絶べし
汝曹ともの

伊川先生曰
人無父母生日當倍
悲痛更安忍置酒
張樂以為樂若具
慶者可矣

○伊川先生曰人無父母生日當倍
悲痛更安忍置酒張樂以為樂若具
慶者可矣
存生の時と
誕生の時と
悲痛と倍
張る理あり
存生
置酒張樂と張る理あり

呂氏の童蒙訓
曰事君如事親事官
長如事兄與同僚如
家人待群吏如
奴僕愛百姓如妻子
處官事如家事

○呂氏童蒙訓曰事君如事親事官
長如事兄與同僚如家人待群吏如
奴僕愛百姓如妻子處官事如家事

如群吏と待する
奴僕の如く
百姓と愛する
妻子の如く官事
と處する家事
の如くして

宋の呂文清と云ふ人の、童蒙への訓を、主君
と大切にとんずるは、親につらうがごとく、官吏と
重ざるは、親をほつるがごとく、同僚への家の人の
ごとく、郡吏の奴僕のごとく、百姓の妻子のごとく、
我が官事の家事のやうにとんずる。然、後能盡吾
べし。右の條々ありて、たゞり。

然して後に能
五口之心と盡す
如毫末も至ら
不有は皆我
心未盡未所有
也(未)に張

盡也 右の「おごり」が心と盡す、いふものなり
直宅髪もも至極、さう心の盡す、おごりもも
之心如有毫末不至皆吾心有所未
盡也

或の問簿佐令
と佐る者也簿の
爲に欲する所令或
不從奈何
伊川先生曰く
當に誠意心と

或人の問、けさ、主簿の、もの、縣
と縣令、まご、たり、伊川先生曰、當、以、誠、意
動之今令與簿不和只是爭私意令

以之と動す當
今令と簿與和
争之令是私意之
長若能及父兄之事
之道と以之之ふ
事過則歸已に
歸善則ち惟令
に歸不こと恐る
此誠意心と積む
人と動し得不こと有る
明道先生の曰く
一命之士と苟に
心と物と愛する
に存する人に於て
必ず濟所有ん

是邑之長若能以事父兄之道事之
過則歸已善則惟恐不歸於令積此
誠意豈有不動得人 先生曰く、て、日、人、の
用、如、の、や、即、令、主、簿、縣、令、の、不、和、や、り、私、
の、意、と、か、ら、ま、ゆ、ま、り、全、體、縣、令、の、郡、邑、の、長、
官、や、れ、の、父、兄、と、ま、り、て、過、失、の、引、け、善、事、
の、縣、令、の、ゆ、り、ま、り、て、誠、心、と、積、む、に、當、り、て、和、ま、り、

明道先生の曰く
一命之士と苟に
心と物と愛する
に存する人に於て
必ず濟所有ん

明道先生曰。一命之士苟存心於
愛物於人必有所濟 官職の法に九命あり
初、一命、の、命、の、心、の、あり、

一命之士と苟に
心と物と愛する
に存する人に於て
必ず濟所有ん

職と愛する一命、一命、二命、は、う、り、ま、り、て、さ、ら、に、
物と愛する、心、入、り、ま、り、て、世、の、人、と、經、濟、す、る
の、事、の、一、命、の、心、の、あり、ま、り、
ま、り、て、高、官、と、ま、り、

劉安禮問臨民明道先生曰使民
各得輸其情問御史曰正已以格物
得使使吏御
其情之輸
生之曰民各
其情之輸
得使使吏御
正已以格物
格物

伊川先生曰居是邦不非其大夫
此理最好
不此理最好

童蒙訓曰當官之法唯有三事曰

○劉安禮問臨民明道先生曰使民
各得輸其情問御史曰正已以格物

○伊川先生曰居是邦不非其大夫
此理最好

○童蒙訓曰當官之法唯有三事曰

清曰慎曰勤知此三者則知所以持

身矣

色人皆不宜與之相接巫祝尼媪之

類尤宜疎絶要以清心省事爲本

職

在もの農人諸工商賣僧尼藝技
遊依まは人ままがハ
是と慎むく人又私欲の心とさりて清らふ
是と勤むく人又私欲の心とさりて清らふ

後生少年乍到官守多為猾吏所
多猾吏の爲に
餌せ所て自省
察せ不得所毫
未而一任之間
復敢て舉動不

大抵官と作て
利と嗜ハ得所
此と以て重譴
と被と良に惜
可也矣
官に當都ハ先
暴奴心と以て戒
と為事不可

當必中不若
無若先暴怒
すれハ只ハ能自ら
害す豈能人と
害せんや當二度
官に當て事と
處するハ但務
て實と著よ文
字と塗捺一
日と追改一押
字と重易する
如苗圃一敗露
ハ罪ハ相得と反
て重一亦誠心
養ハ君に事て
欺る不所以之

○後生少年乍到官守多為猾吏所
餌不自省察所得毫末而一任之間
不復敢舉動

當時の人少年により心
官守にうけんとて
復敢て

の爲に餌とやう我と釣といふ不省察して身
利ハ毫末とむりやして一任もそくふと舉動

大抵作官嗜利所得甚少
而吏人所盜不貲矣以此被重譴良

可也
大抵あるに官とまりて利欲とくく
嗜りても吾得とくくハ少くして

者先以暴怒為戒事有不可當詳處
當官

依て重譴とくくハ少くしてハ惜むる
此ハ當官

之必無不中若先暴怒只能自害豈
能害人

官に當り此ハ日恭にこみ怒ると戒む
何事ぞ不可とありハ譴と處つて考へ

當官處事但務著實如塗捺文字追
改日月重易押字萬一敗露得罪反

官職の務ハ實意身一と改む
文字と塗捺又ハ月日と跡より追

重亦非所以養誠心事君不欺之道
也

改め押字とくくハ易ヤリ
改む重罪たるぞ誠と以て君に欺むる道の

道にあり

道にあり

道にあり

道にあり

道に非也

王吉疏と上して曰く夫婦人倫の大綱大壽の萌也世俗嫁娶太蚤未だ知母爲之道と知未て而て子有是と以て教化明るを不て而て其多矣す

文中子曰く婚娶して而て財を論ずる夷虜之道也君子其郷に

人不古者ハ男ト之族各徳と擇財を以て禮と爲す

蚤婚少して聘ハ人ハ教ふ倫と以て妾媵數無ハ人に教に亂れと以て且貴賤等有一夫一婦庶人之職也

司馬温公の曰く凡議婚姻と議婦與之性行

○王吉上疏曰夫婦人倫大綱大壽

之萌也世俗嫁娶太蚤未知爲人父

母之道而有子是以教化不明而民

多矣王吉といふは漢の代の朝臣なり天子ハ上疏とて曰く夫婦昏禮の弊ハ人

倫の大綱なり人の命乃大に壽大にあづかること

の世の嫁娶ハ大に蚤すたり女子十五六

教訓ハ二十はより取組よとたてて女子のり

文中子曰婚娶而論財夷虜之道

也君子不入其郷古者男女之族各

擇徳焉不以財爲禮文中子曰く婚娶して而て財を論ずる夷虜之道也君子其郷に入らず古者ハ人徳を擇むと第一として財を以て禮と爲さず

○蚤婚少聘教人以倫妾媵無數教

人以亂且貴賤有等一夫一婦庶人

之職也年少から結婚の聘ハ人ハ教ふ倫と以て妾媵數無ハ人に教に亂れと以て且貴賤等有一夫一婦庶人之職也

○司馬温公曰凡議婚姻當先察其

昏與婦之性行及家法何如勿苟慕

及家法何如
其富貴也
慕之勿れ塔苟
賤なりと雖安を
異時富貴
不肖乎苟
富盛と雖安を
異時貧賤
婦者家之由
盛衰する所也苟
一時之富貴と慕
而之と娶ば彼其
富貴と杖で其
夫と輕て其舅

其富貴塔苟賢矣今雖貧賤安知異
時不富貴乎苟爲不肖今雖富盛安
知異時不貧賤乎
富貴なりと慕ふ人ハ其富貴なりとも不肖者家
之所由盛衰也苟慕一時之富貴而
娶之彼杖其富貴鮮有不輕其夫而
傲其舅姑養成驕如之性異日爲患
庸有極乎借使因婦財以致富依婦
勢以取貴苟有丈夫之志氣者能無
愧乎
家之盛衰おほくハ婦人より起り一時の
富貴と慕ふと云ふハ夫と輕ト舅姑に傲
ぐり如くして等その禍災極りわすれ又た
婦人のがやて家富なりとも丈夫たるもの愧にあり

姑に傲不し有
性と養ひ成バ
異日患と爲と
庸んぞ極有ん
乎借使婦の財
に因て以て富と
致婦の勢ひに
依て以て貴と
取も苟くも夫
夫之志氣有者
ハ能愧無乎
安定の胡先生
曰く女と嫁するに
必ず須く五百家に
勝者有る須五家
に勝ハ則ち女之
人に事すと必ナ

○安定胡先生曰嫁女必須勝五家
者勝吾家則女之事人必欽必戒娶
婦必須不若吾家者不若吾家則婦
事舅姑必執婦道
來て舅姑につくるみそ婦の道をつくらしむる
又女と他家へ嫁するも五家に勝るがと吉と
向方へ之てるハ舅姑に
てきて敬戒するハ

飲之必戒婦と
娶にハ必ず須く
五百家に若く者
須五百家に若く
則婦の舅姑に事
必婦道と執

或の問孀婦ハ
理に於て取可
不に似如何伊川
先生曰然凡取
若節と失者を取
て以て身に配
已節と失也
又問或ハ孤孀貧
窮以て託する無
者有ハ再嫁す可
けん否曰只是

○或問孀婦於理似不可取如何伊
川先生曰然凡取以配身也若取失
節者以配身是已失節也孀婦と妻と

又問或有孤孀貧窮無託
者可再嫁否曰只是後世怕寒餓死

故有是說然餓死事極小失節事極
大又問或ハ孤孀貧窮以て託する無者有ハ再嫁す可けん否曰只是後世怕寒餓死

○顏氏家訓曰婦主中饋唯事酒食

衣服之禮耳國不可使預政家不可

使幹蠱婦人の役めハ食物供饋酒宴の事衣服裁成などの事とつとるべからず貴

如有聰明才智識達古今正當輔佐

君子勸其不足必無牝鷄晨鳴以致

禍也その内ハ才智聰明のむまれつと古今の事やんた

君子不足君の不足は君の輔佐に外聖人聖人の不足は聖人の輔佐に外勸當必無此鷄勸當必無此鷄晨鳴晨鳴

致と無也
江東の婦女略
交遊無其婚姻
之家十數年の
間未相識未者
或唯信命贈遺
を以て慇懃と致
す(未) 塲渡(馬)

鄴下の風俗専
ら婦を以て門戸
と持曲直と争
ひ訟造請逢迎
子に代官と
求夫の爲に屈
恒代之遺風乎

○江東婦女畧無交遊其婚姻之家
或十數年間未相識者唯以信命贈
遺致慇懃焉

鄴下風俗專以婦持門戶争訟曲直
造請逢迎代子求官爲夫訴屈此乃

恒代之遺風乎

のありし事
容と逢迎又ハ人の許へ造請ヤその外夫の
體の咎と許へひき又ハ子のとあふ官とわえたぐ
ひ土地の風俗なり是れ恒代之遺風儀なり

や恒代の燕
の國なり

夫人民有て而
後夫婦有夫
婦有て而後
父子有父子有
而後兄弟有
一家之親此三
の者而已茲自
以往九族に至
る皆三親に本
故に人倫に於
重と爲也篤不
ある可う不
矣(於)

○夫人民而後有夫婦有夫婦而
後有父子有父子而後有兄弟一家
之親此三者而已矣自茲以往至於
九族皆本於三親焉故於人倫爲重
也不可篤

兄弟者分形連氣之
人也方其幼也父母左提右挈前襟

父母左提右挈
前襟後襟食
則衣裳同
衣則衣裳同

後裾食則同案衣則傳服學則連業
遊則共方雖有悖亂之人不能不相

學則業連
遊則方共

愛也
凡祭誠に形血氣と分ちて幼少
にりつ共方に遊食事の案も一所なり衣服
ハ傳あり學も連りて業なり

有と雖相愛セ
不と能不也也

及其壯也各妻
適を悖亂人物も幼年ハ

其壯に及て各
其妻と妻と

其妻各子其子雖有篤厚之人不能
不亦衰也

篤厚之人有
雖少衰不

不亦衰也
且篤厚なる人も心

能不也也
媿媿之ハ兄弟に

媿媿之比兄弟則踈
薄矣今使踈薄之人而節量親厚之

比兄弟則踈薄之
今踈薄之人

媿媿之比兄弟則踈
薄矣今使踈薄之人而節量親厚之

之思と節量使
猶方底して而

恩猶方底而圓蓋必不合矣唯女悌
深至不為傍人之所移者免矣

必合不唯友
悌深至傍人

深至不為傍人之所移者免矣
たすに異ヤ

之為に移所不
者免と猶ハ

我皇考訓誡
宋朝の大いに柳仲塗といへる人

望弟婦等拜堂
即上手低面聽

望弟婦等拜堂即上手低面聽
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

即上手と上面
訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

訓誡と聽

我皇考訓誡
父の為人ハ孝心あつて嚴よりそ

曰く人家の心
 窮不義者
 無盡く婦と娶
 て門に人異姓
 相聚に因て長
 と争短と競ふ
 漸漬日に聞備
 愛私藏以致背
 戾分門割戸患
 若若賊
 能不為婦人言
 所惑吾見多矣
 若等寧有是耶
 退則惴惴不敢
 出一語為
 不孝事開輩抵
 此頼之得全其
 家云

曰人家兄弟無不義者盡因娶婦入
 門異姓相聚爭長競短漸漬日聞備
 愛私藏以致背戾分門割戸患若若賊
 能不為婦人言所惑吾見多矣若等
 寧有是耶退則惴惴不敢出一語為
 不孝事開輩抵此頼之得全其家云

則ち惴惴とて
 敢て一語と出で
 不孝の事と為
 不開が輩此に
 抵て之に頼て其
 家と全まると得
 と云矣

伊川先生曰く
 今人多兄弟
 之愛を知らず
 且問閭小人の如
 一食を得ハ必ず
 先以て父母に食
 せし夫何の故ぞ
 父母之口重於己
 之體也至其於犬
 馬亦然待父母之
 犬馬必異乎己之

伊川先生曰く
 今人多兄弟
 之愛を知らず
 且問閭小人の如
 一食を得ハ必ず
 先以て父母に食
 せし夫何の故ぞ
 父母之口重於己
 之體也至其於犬
 馬亦然待父母之
 犬馬必異乎己之

伊川先生曰く今人多不知兄弟之
 愛且如問閭小人得一食必先以食
 父母夫何故以父母之口重於己之
 口也得一衣必先以衣父母夫何故
 以父母之體重於己之體也至於犬
 馬亦然待父母之犬馬必異乎己之

夫何の故ぞ父母
之體已之體より
重し以也。大馬
に至りて亦然。父母
之犬馬と待すと
必ず已之犬馬に
異也。獨父母之
子と愛するに却
て已之に三つを輕し
甚矣。若者仇敵
の若に至る世と舉
て皆此如し。或心
之甚し乎矣。於
横渠先生曰く
斯干の詩に言
兄と弟及式相
好し。相猶しく無
言さうハ兄弟宜く

犬馬也。獨愛父母之子。却輕於已之
子甚者至若仇敵舉世皆如此惑之
甚矣 今日問答の小人といふも食物衣服にて一品
に於てサリヤリ馬犬も父母の犬馬とありては
異別なり。ウヤウの理屈さぐらふに兄弟の道は不
知のわかれ。兄弟父母の子サリ。まうふ已が子と云
く愛し。父母の子ハ輕やくみえ。又ハ仇敵にやひ入
りのわりと是皆利と
私意の惑サリ、

○横渠先生曰。斯干詩言兄及弟矣。
式相好矣。無相猶矣。言兄弟宜相好。
不要相學。猶似也。人情大抵患在施。

相好す宜し。相
學と要せず。猶
似也。人情大抵
患之と施して報
見不則ち輕に
在。故に因然と
能不。相學すと
要せず。已之を
施さん而已。宣
伊川先生曰く
近世淺薄なり。
相歡狎と以て。
相與すと爲す。
圭角無と以て
相歡。慈愛すと爲
此の如者安んぞ
能久ん若久き

之不見報則輕。故恩不能終。不要相
學已施之而已。 詩經の斯干といへる患の
凡て兄弟ハたがひに
相好し。これ 報ハる。兄弟ハたがひに、彼
が善ハ五口も善うんや。人と學まじ。彼くも
くまじ。いと相猶まじ。たがひに。人情のそく
くまじ。人に施して。人恩を。報がれ。まじり
て。輕く。末然。施す。相と
まじ。行た。施す。相と

○伊川先生曰。近世淺薄。以相歡狎。
爲相與。以無圭角。爲相歡愛。如此者。
安能久。若要久。須是恭敬。君臣朋友。
皆當以敬爲主也。 近世の人々。心淺薄。の
たがひ。相歡。まじり。

と要せば須く是
恭敬す須君臣
朋友皆當に敬
と以て主として為當
也須當二度

横渠先生曰く
今之朋友其
善柔と擇で以
相與ふ。肩と拍
袂と執て以て氣
合と為一言合不
ハ怒氣相加。朋
友之際其相下
と倦不と欲す。
故に朋友之間
於て其敬と主
と者。日に相
親與。效と得

と云ふは、相與り作法あるハ、圭角無くして、
幾久きも、幾久く、んや、と、君臣父子兄弟朋友
の、あひど、恭敬ある、あ、
幾久きも、れ、あ、

○横渠先生曰。今之朋友。擇其善柔
以相與。拍肩執袂。以為氣合。一言不
合。怒氣相加。朋友之際。欲其相下。不
倦。故於朋友之間。主其敬者。曰相親
與。得效最速。今のまじりハ善柔とつとて、
あひて、氣の合、い、ど、たれ、く、く、
づれ、ハ、怒氣、あ、い、く、く、く、く、
一、く、不、倦、己、が、身、を、引、下、す、に、
い、た、べ、い、日、に、親、く、效、あ、る、ハ、

最速

童蒙訓に曰く。
同僚之契。交
兼之。分。兄弟
之義有。其子孫
に。至。亦。世。之。
講。前。輩。專
此。以。て。務。と。為
今。人。之。と。知。者
蓋。少。又。舊
舉。將。及。嘗。舊
任。の。按。察。官。為
者。の。如。後。已。が
官。上。に。在。雖。も
前。輩。皆。辭。避。
て。下。坐。に。坐。風
俗。此。の。如。安。ん。ぞ
厚。く。不。と。得。ず

○童蒙訓曰。同僚之契。交兼之分。有
兄弟之義。至其子孫。亦世講之前輩
專以此為務。今人知之者。蓋少矣。又
如舊舉將及。嘗為舊任。按察官者。後
已官。雖在上。前輩皆辭避。坐下坐風
俗如此。安得不厚乎。ハ、兄弟の義理あり、又舊任の按察つ、居人
又、舊を、れ、を、樂、て、一、人、が、ハ、た、ハ、む、さ、り、た、く、
後、々、已、が、官、上、に、あ、り、も、身、辭、避、て、下、坐、に、
居、る、ハ、一、や、り、う、や、う、に、あ、る、心、で、厚、く、す、べ、

○范文正公為參知政事時。生諸子

范文正公象知政事為時諸子に止口日く五言貧き時汝が母與五口親と養ふ汝が母躬爨と親而して五口親の旨未嘗充未也今得而して厚禄を得る。以て親と養へんと欲も親在不汝が母亦已に蚤世す五口最も恨所の者忍んで其石曲中富貴貴之樂を享今も吾吳中の宗族甚と衆五口に於てハ

曰吾貧時與汝母養吾親汝母躬執爨而吾親甘旨未嘗充也今而得厚禄欲以養親親不在矣汝母亦已蚤世吾所最恨者忍令若曹享富貴之樂也吾吳中宗族甚衆於吾固有親疎也然吾祖宗視之則均是子孫固無親疎也苟宗之意無親疎則饑寒者吾安得不恤也自祖宗來積德百餘年而始發於吾得至大官若獨享

固に親疎有也然も五口祖宗之と視之則均く是子孫に於て固に親疎無也苟祖宗之意親疎無也則も饑寒の者吾安んぞ恤まざると得。祖宗自來も徳と積と百餘年而して始も五口に發大官に至ると得。若も獨富貴と享て。而も宗族と恤まば不異日何と以て祖宗に地下に見る今

富貴而不恤宗族異日何以見祖宗於地下今何顔入家廟乎於是恩例俸賜常均於族人并置義田宅云
正公の象知政事たりし其の子息にり入されりるの汝が母と我し夫婦一所に吾兩親にや。いかに事しとき汝が母手づつ。飯を爨。まうれども五口親。いまごころの甘旨。十分。分る官。は。か。り。今。厚。禄。と。得。る。汝。が。母。も。五。口。に。世。し。過。さ。り。ぬ。恨。ら。ぬ。汝。が。母。も。富。貴。の。た。り。と。享。又。心。も。か。け。お。た。く。忍。ぶ。こ。れ。え。り。や。吾。も。吳。中。の。宗。族。甚。と。衆。こ。う。世。に。在。り。て。は。親。と。養。ふ。疎。の。多。く。ま。り。れ。ども。五。口。宗。親。より。視。は。均。き。子。孫。に。親。疎。を。し。ま。ら。ぬ。五。口。の。祖。宗。の。心。と。ら。ぬ。は。饑。寒。の。苦。と。も。恤。ま。さ。ら。ぬ。先。祖。の。積。徳。を。以。て。大。官。に。つ。き。

地下に見る今

徳を以て

三十五

何の顔の家廟
に於て是に
於て用心例奉賜
常に族人に均く
并に義田宅を
置と云(矣)於(也)

下に獨り立身して宗族を恤す何の顔に地
下して就祫に逢下や神靈の家廟へ入る義理
人へ均く賜り又田地宅を別して一族と
けりなり義田
宅と答ふ

司馬温公曰凡為家長必謹守禮
法以御羣子弟及家衆公之以職授
之以事而責其成功制財用之節量
入以為出稱家之有無以給上下之
衣食及吉凶之費皆有品節而莫不
均一裁省冗費禁止奢華常須稍存

司馬温公曰凡為家長必謹守禮
法以御羣子弟及家衆公之以職授
之以事而責其成功制財用之節量
入以為出稱家之有無以給上下之
衣食及吉凶之費皆有品節而莫不
均一裁省冗費禁止奢華常須稍存

出と為家之有
無に稱て以て
上下之衣食及
吉凶之費に於て

家内之羣の給へる職事と授その成功と
責りて其財用の節と制の外より入る出との
多少家の有無に稱べし衣食の節に萬事の
費は品の節あるべし何事も均くして冗費と
省て奢華と禁止して常々その

省一奢華と禁
止し常に須く
稍贏餘と存せ
以て不虞に備
須(須)二度

贏餘以備不虞
右廣明倫

右廣明倫

小學卷之六終

